

〈本賞〉石井幹子さん

(照明デザイナー)

二〇一三年 七月八日(土) 於・プレスセンターホール

本年の後藤新平賞は、「ライトアップ」の概念を日本に先駆的に導入した照明デザイナーの石井幹子さんに贈呈された。

受賞理由は「都市を光によって活性化させるというプロジェクトを六〇年以上にわたって展開され、作品は東京タワーや横浜ベイブリッジからアメリカ、ヨーロッパ、中近東、東南アジアまで及び、その数は千を超える。(…)その発想と業績は、都市計画、都市経営にあたって何よりも地域の歴史を踏



まえながら未来に向けて革新するという後藤新平の業績と軌を一にするものがある」とされた。

受賞講演では、石井さんが自身の仕事をスライドで紹介。建築物のライトアップ前の写真がライトアップ後に切り替わると、その鮮烈な効果に、会場からは静かなため息がもれた。

また、美的効果の追求だけでなく、都市という屋外環境に長期間設置するための天候への耐久性、電力消費を抑える工夫など、多くの実例を織り交ぜて語られる講演に、聴衆の興味は尽きなかった。

(編集部)

「衛生の道」からみた関東大震災

関東大震災百周年

二〇一三年 七月八日(土) 於・プレスセンターホール

昨年度まで五回に亘り、「衛生の道」を考える」に継続して取り組んできたが、その集大成として今春、藤原書店から『別冊『環』28 後藤新平 衛生の道 1857-1929』が刊行された。

本年は関東大震災から百年に当たる。後藤新平が生涯追い続けた「衛生の道」という観点から、後藤は、関東大震災の復興ビジョンをどう作り、復興事業をどのように進めていったかをテーマにシンポジウムがもたれた。

パネリストは青山佶氏(後藤新平の会代表幹事、明治大学名誉教授)、春山明哲氏(後藤新平の会幹事、早稲



田大学台湾研究所招聘研究員、伏見岳人氏(東北大学法学部教授、藤森照信氏(江戸東京博物館館長、建築家)、渡辺利夫氏(東京工業大学名誉教授、拓殖大学顧問、公益財団法人オイスカ会長)。司会は橋本五郎氏(読売新聞特別編集委員)。まず、各パネリストから問題提起がなされた。

青山氏は「将来世代の生を衛ろうとした後藤の、震災復興事業における最大の遺産は環状道



路（現在ほぼ実現）。Ch・ビーアドの助言『新街路の計画、路線内の建築禁止、鉄道駅と街路計画の一体化』の意味を探る。

春山氏は「国家を治するの医」を志した後藤「衛生の道」を九つの里程標^{マイルストーン}で提示。『万有学』『審事者』『衛生制度の三成分、科学・芸術・実地』『学俗接近』『文装的武備』『衛生の道』等の独特の言葉を創出し、「言葉の力」に依拠した、近代日本でも稀な政治家だった。

藤森氏は「明治維新後の近代都市の誕生において、後藤の震

災復興計画は、市区改正から都市計画へとという流れに位置づけられる。後藤は内務省衛生局官僚としてこの流れに立ち会っていた。その中で水道が果たす役割は重要。古家の全面大改修や区画整理を通じて日本の都市計画が確立した。

渡辺氏は「後藤思想の源流『国家衛生原理』から「即物的社会観」「価値の徹底的な相対化」「国家起源説」を抽出できる。そこを起点に、後藤のユニークな着想と実行力の実例として、日清戦争帰還兵の検疫事業、台湾で



のアヘン対策、台湾総督府民政長官としての植民地経営、初代総裁としての満鉄経営がある。

伏見氏は「後藤内務省時代の『衛生の道』は、終生貫いた思想「生を衛る」↓自治↓都市と展開されており、震災復興は「衛生」の最たるものだが、震災復興期、後藤は多忙で、「衛生」に結びつく表現を直接的にほと



んど残していないので、ビーアドという補助線を介してその実相を見出す。そして新たに見出された資料「幻の高速鉄道（地下鉄）計画」について紹介。

問題提起を受け、司会の橋本氏は「後藤が直面した問題は現在もアクチュアルである」として各氏に「現在の政治が後藤新平から学ぶべきものは何か」を問い、活発に議論。

尚、本シンポジウムの詳細は、年内刊行予定の『後藤新平の会会報』No.29に収録予定です。是非この機会に「後藤新平の会」にご入会戴ければ幸いです。（編集部

